

# 観察距離が観察者効果に及ぼす影響

○井出桃果 島野萌 西村聡生

(安田女子大学心理学部)

## 問題と目的

他者の存在による課題遂行への影響は観察者効果と呼ばれ、単純課題遂行中には他者がいると作業効率が良くなり（社会的促進）、複雑課題遂行中には他者がいると作業効率が悪くなる（社会的抑制）傾向がある（Allport, 1924）。吉田（1994）は、単純課題では観察距離（80cm、160cm、400cm）の影響はみられず、複雑課題では観察距離が遠いほど他者の存在による正答数の増加量が多い傾向を報告した。

本研究では、手を伸ばせば相手に触れられる程度の個体距離の近接相（ホール, 1970）の50cm、両者が手を伸ばせば指先が触れ合う程度の個体距離の遠方相の100cm、相手に触れることはできず公式な面談等で用いられる社会距離の遠方相の225cmの3つの観察距離を設定し、観察距離が単純課題での社会的促進及び複雑課題での社会的抑制に及ぼす影響について検討する。

## 方法

参加者 安田女子大学生 46名。

課題 単純課題には隣り合った数字の足し算を、複雑課題にはギリシャ文字を数字に変換しての足し算を使用した（日本心理学会認定心理士資格認定委員会, 2015）。課題は参加者内で操作し、順序はカウンターバランスをとった。

観察距離 50cm、100cm、225cm とし、参加者間で操作した。

手続き 参加者は、課題ごとに観察者なしの状態です練習試行1分、観察者ありの状態です本試行3分、計算課題を遂行した。2種類の課題終了後、観察者が気になった、課題に集中できた、緊張した、の3項目について、いずれも5件法で評定した。

## 結果

課題の解き方を誤って理解していた2名を分析から除外した。本試行の正答数から練習試行の正答数の3倍を引いた結果を、観察者の存在による正答数の増加量とし、課題別に距離を参加者間要因とした分散分析を行ったところ、単純課題 ( $F(2, 25.25) = 0.14, p = .867$ )、複雑課題 ( $F(2, 25.38) = 0.26, p = .775$ ) とも有意でなかった（図1）。また遂行量の増加量（単純課題  $F(2, 25.28) = 0.04, p = .956$ 、複雑課題  $F(2,$

$26.54) = 0.09, p = .911$ )、誤答数の増加量（単純課題  $F(2, 27.19) = 1.65, p = .211$ 、複雑課題  $F(2, 23.59) = 0.96, p = .396$ ) についても同様の分散分析を行ったが、いずれも有意でなかった。

実験中の状態の評定値（図2）には、観察距離の影響はみられなかった ( $F_s < 1$ )。

図1. 課題別の距離ごとの正答数の増加量。エラーバーは標準誤差。

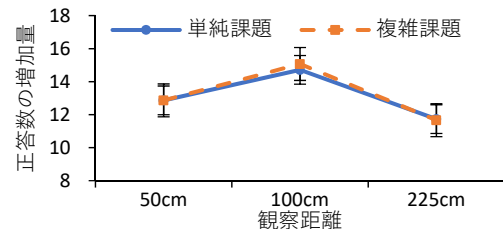
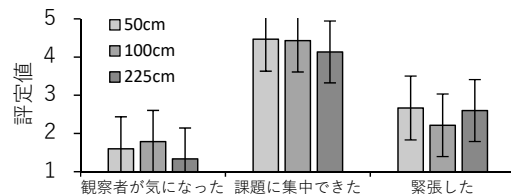


図2. 質問項目別の距離ごとの評定値。エラーバーは標準誤差。



## 考察

観察距離の違いによる観察者効果への影響はみられず、他者の存在による課題遂行への影響は観察されていること自体により生じることが示唆された。

単純課題、複雑課題ともに距離にかかわらず社会的促進がみられた。参加者は距離に関係なく観察者が気になっておらず、課題に集中できていたことから、本研究では参加者は観察者の存在に注意を向けず、課題のみに注意を向けており、複雑課題で注意の葛藤（Sanders, 1981）が生じず、社会的抑制がみられなかったと考えられる。

課題の難易度によらず社会的促進がみられた本研究では、本試行より短い練習試行を観察者なしの基準として用いた（吉田, 1994）ため、観察者の有無が順序や長さで交絡していた。観察距離の影響をはじめとした観察者効果の更なる理解のため、今後これらの要因の統制が求められる。